

令和2年度 出雲医療看護専門学校

教育課程編成委員会 議事録

日時：令和2年8月1日（土）14：45～16：15

場所：出雲医療看護専門学校 1F 講堂

教育課程編成委員出席者

- 原 徳子 （島根県看護協会 常任理事）
- 田中 真美 （島根大学医学部附属病院 看護部長）
- 福田 勇司 （島根臨床工学技士会 会長）
- 明穂 一広 （島根大学医学部附属病院 MEセンター 技士長）
- 太田 真英 （島根県理学療法士会 会長）⇒欠席
- 福田 淳 （デイサービスサイン マネージャー）
- 西本 祥久 （山陰言語聴覚士会 副会長）
- 藤江 美穂 （出雲市立総合医療センター）⇒欠席

議事録

議題	内容	発議者
1. 開会挨拶 2. 自己紹介 3. 教育課程編成委員会について 4. 各学科報告	<p>教育課程編成委員会の趣旨と目的について</p> <p>看護学科 前年度の会議よりコミュニケーション能力の不足の問題から学科同士の交流やコミュニケーションの演習などを取り入れることで違ってくるのではないかと、チーム医療のカリキュラムがあればよいのではないかなどの意見が出た。それに対し4学科合同の研修を計画した。目的として異なった専門性の高い各々の分野が知識と経験を持ち寄り、その連携から最良の結果を求めるために、講義とグループワークを通してチーム医療を理解し、コミュニケーション力を身につける。とし8回の研修を予定した。しかし新型コロナウイルス感染拡大の影響により休校となり実施には至っていないが、1 コミュニケーション力について2 チーム医療について3 学生に求めること4 本校に求めること5 コロナウィルスの影響についてという5点で話し合いを行い、解決方法と今後の対策を確認した。</p>	松井

理学療法士学科

チーム医療に不可欠な「コミュニケーション能力の向上」を果たすべく、学生へどのような指導を心掛けたらよいのか？が昨年度からの継続課題であった。これを受け、本年度はコミュニケーション力向上のためのプログラムを実践予定であったが、コロナ禍により正規授業を優先せざるを得なくなり、プログラムの実践はできていない。臨床実習の実習も2週間しかできないのが現状。そこで今回は、臨床の立場から、主に「コミュニケーション力向上のための教育のあり方」についてご意見を賜った。

医療職に就くためにはコミュニケーションの高いスキルが必要となることは事実。コミュニケーション力を高めるには「演じる能力を身に付けること」が不可欠だと考える。

学校の人間教育の部分を「見える化」してはどうか。いろいろな場面を想定した課題解決学習によるコミュニケーション力向上、人間教育のプログラム構築と評価法など、これから実践したい。

臨床工学技士学科

前回の委員会でコミュニケーションが弱いという指摘からコミュニケーション力向上のための教育の在り方について話し合った。

コミュニケーションについて

年々コミュニケーションが取れない学生が増えてきている。

学生にコミュニケーションの必要性を常に意識させ、ボランティアなどに積極的に参加を促すことと卒業生や技士会などの交流会を開催する。

学生に対して、常に疑問を持ち向上心を持つ学生が良いので、ン期ごとに目標を持たせ、しっかりと振り返りをさせる実習前に何を学ぶかを明確にさせる。

それに対し、学校はコミュニケーションの場面の提供、意見をまとめられる力の育成。臨床工学技士の働き方の伝達。教員間の意思統一を行うことで実践していく。

言語聴覚士学科

コミュニケーション向上として、病院内でのコミュニケーションと对患者さんとのコミュニケーションに分ける必要があるが、言語聴覚士として修得すべき患者とのコミュニケーションについての課題について検討を行い取り組んだことを報告する。

学生が事前準備をして臨んでいるが、本来は相手に合わせて会話を変えるものであり、相手に合わせる視点が必要。今回は自己評

	<p>価だが、相手の感想評価を聞くという他社評価も大事である。また「話が続いた」が振り返りの視点になっているが、実施前の注意点がどれだけ達成できたか、何が課題として残ったかなどを考えられるとよいという意見があり、今後は他者評価や振り返りの視点を含めて考えていく。</p>	
意見交換	<p>今年度の教育の現状報告  実習についてと遠隔授業について  各学科からの報告にあったコミュニケーション力、人間力、社会人基礎力等の課題について意見をいただきたい  臨床工学技士の現場では、Dr.からの問いかけにすぐに返答できる能力。YES また NO、大きな声での返答などができることを教育現場に期待したい  問いかけに対しての返答には、自信と余裕が必要。相手を見ること。相手のことを知っているという土台があることで余裕が生まれる。声掛け等のタイミングがわからないなど、新人の悩みは一緒に、他職種を知ることが必要  多くの学生を採用した観点から、学校現場に求めるものは何か</p> <p>学校は基礎教育と考え、現場でしか学べないことの方が多い。基本的には挨拶と接遇ができることが必要。看護とは何か、患者がどういう状況にあるのかを学校で学び、その後現場教育で育てていく  企業側からの視点では新人は少しでも長く勤めて欲しいという願いであり、そのマネジメントが必要。マネジメントとしてコミュニケーションや社会人基礎力の要素は大きいと思う。学校へのお願いとしては、コミュニケーション力をつけていく過程を学生が確認し、学べる仕組み取り入れてほしい。</p>	<p>松井</p> <p>明穂先生</p> <p>西本先生</p> <p>松井</p> <p>田中</p> <p>福田</p>

	<p>コミュニケーション力は傾向を知って訓練する。専門職業人として、自分自身がコミュニケーションである。患者の前にどのようにしてその人の前に立つのか。笑顔が足りない、言葉遣い、話し方など傾向を知り、努力して補いながら人と接していくことが必要である。</p> <p>基礎教育も変化していく。また学生も変化していく。そして社会も変化する。患者の倫理も変化していく。そのようなことから教育現場と臨床現場のお互いの連携と理解が必要。</p>	原
最後に	<p>建学の理念で、実学教育・人間教育・国際教育の3本柱を大切にしているが、人間教育が最も大切に力を入れていかないといけない。今後とも業界の方と連携していきたいと考えているので、今後ともご意見いただければ幸いです。</p>	松井